

コラム 21

エリトリア難民キャンプにて



2011年6月、東部スーダンにて、エリトリア難民キャンプを訪ねた。午前8時に出発し、ワド・シェリフェ難民キャンプに向かい、エリトリア難民からヒアリングを行った。25年前に来た難民は、キャンプで生まれた子どもがもう20歳になろうとしており、祖国を知らない次の世代がどんどん増えている。

2年前、スーダン政府と国連機関が、「食糧の配給を減らす代わりに、難民にも生計手段を持たせる」方針に変えるとして、食糧を20%カットし、代わりに職業訓練を行ったり、一部キャンプではキャンプ周辺での耕作を認めたりはしているが、多くの難民には就職がなく、困窮しているとのこと。

キャンプで生まれた若者たちに聞いても、一番の問題は町に出ても仕事がないことだという。彼によれば、友人が難関を突破してカッサラの大学に入り、卒業したがそれでも就職が無いとのこと、希望が持てないようだ。

「そんなに問題があるなら、何故エリトリアに帰らないのか？」そう質問すると、帰還したらもっと問題が大きく、生活していけるかどうか分からないと答えていた。

スーダン政府は、難民キャンプでは、エリトリアの言語（ディグリ）でなく、アラビア語で教育している。州政府もローカル化する方向で支援を考えているが、連邦政府は、彼らのスーダンへの帰化を認めておらず、将来的にこの問題をどうする方針が定まっていない。

中途半端な状態は色々な意味で厳しいと思う。



以上